

令和 3 年度事業報告



公益財団法人神津牧場

令和 3 年度事業報告

1. 庶務事項

(1) 役員に関する事項（令和4年3月31日現在）

理事 12名、 監事3名

評議員 11名

(2) 役員の異動

理事 岩崎幸雄 死亡（令和3年10月16日）

(3) 職員に関する事項（令和4年3月31日現在）

場長以下 職員 15名 臨時職員 3名

参与1名

(3) 役員会等に関する事項

イ. 令和3年6月3日(木) 14:00-15:00 **執行役員会** シルクセンター国際貿易観光会館会議室（横浜市中区山下町1番地）6月7日開催理事会および6月23日開催評議員会の議題について

ロ. 令和3年6月3日(木) 15:00-16:30 **監事会監査** シルクセンター国際貿易観光会館会議室 令和2年度事業報告及び収支に関する決算報告の監査

ハ. 令和3年6月7日（月）14:00-15:50 **令和3年度 第1回理事会** シルクセンター国際貿易観光会館会議室 令和2年度事業報告及び収支に関する決算報告ほか

二. 令和3年6月23日（水）14:00-15:50 **令和3年度 第1回評議員会** シルクセンター国際貿易観光会館会議室 令和2年度事業報告及び収支に関する決算報告ほか

ホ. 令和3年11月10日（水） 10:30-12:00 本部 執行役員会

11月17日開催の理事会の議題、長期借入金、評議員会の開催ほかについて

ヘ. 令和3年11月17日 14:00-15:30 **令和3年度第2回理事会** シルクセンター国際貿易観光会館会議室 令和3年度中間事業報告、長期借入金ほかについて

ト. 令和3年12月20日**臨時評議員会（書面会議）**長期借入金について

チ. 令和4年2月18日 13:30-15:00 本部 執行役員会

3月2日開催理事会および3月17日開催評議員会の議題について

リ. 令和4年3月2日 **令和3年度第3回理事会** シルクセンター国際貿易観光会館 令和4年度事業計画及び収支予算書ほか

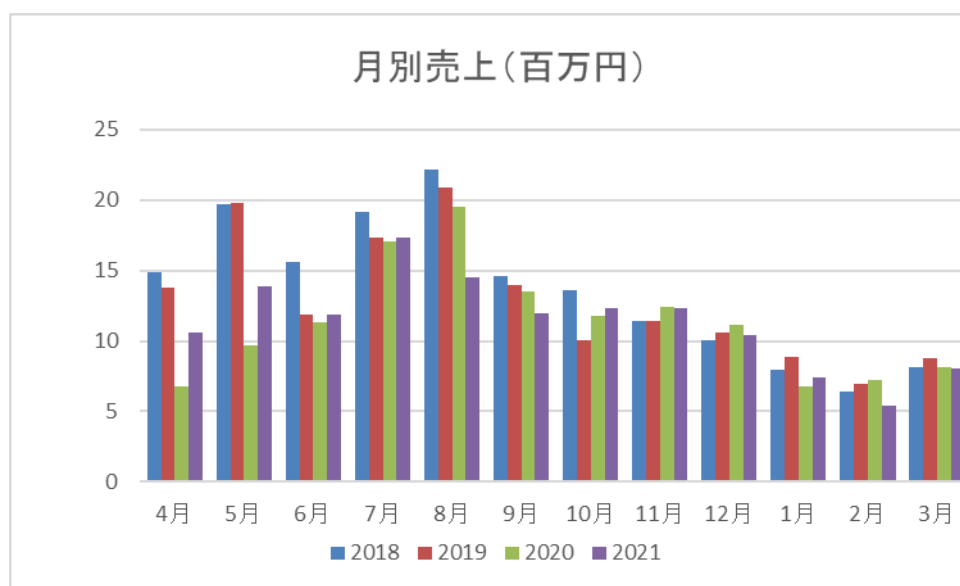
ヌ. 令和4年3月17日 **令和3年度第2回評議員会** シルクセンター国際貿易観光会館 令和4年度事業計画及び収支予算書ほか

２．事業に関する事項

＜一般経過報告＞

令和３年度の事業を取り巻く第一の環境は昨年に続き「新型コロナウイルス」であった。新型コロナ感染症は５月（第４波）、８月（第５波：デルタ株）と続き、その終息と共にアフターコロナが期待されたが、１月からのオミクロン株の流行により、再び不透明な状況に陥った。５月、８月には緊急事態宣言や蔓延防止処置等の行動規制がなされたこともあり、大きな影響を受けた。特に、８月のお盆の時期は帰省客を始め多くの人が牧場に訪れる時期であるが、新型コロナと悪天候の影響で、著しい来訪者の減少となった。この影響は秋まで引き続いた。小学校の移動教室も相次いで中止となり、秋の地域イベントなど交流事業や物販などには大きな影響が生じた。季節的な変動とともに、販売チャネルによる違いも見られる。

売上の低下は卸、ギフト、ロッジ、ミルクバー（道の駅）など全般にあらわれているが、通販がコロナ以前よりも顕著に増加したことが特徴的であった。



また、世界的な物流の停滞によって、飼料価格がじわじわと高騰した。年度末には配合飼料価格は約３０％程度の値上がりとなった。冬に入ってから各種の資材の値上がり傾向が顕著になった。

牧場ではかねてより、建物、施設や生産機械の老朽化が課題となっており、課題解消の一環として、平成２９年に老朽化の著しかった製酪工場の新設を行った。この他、商品配送用のトラックや、作業用の機械の修理などを行ってきた。前年より、ダンプトラックの修理が不可能になるなど、更新が必要な機械が増加してきた。老朽化した生産機械や施設の更新が必要となっている。

牧草・家畜生産の概況

本年は春先の渇水のため１番草がやや少なかったが、その後持ち直し、昨年より増収とな

った。しかし長期的に見るとやや減収傾向がみえ、減収分はイネ WCS と輸入乾草で補うこととなった。生乳生産は濃厚飼料の削減と自家製品販売の比率を高めるために頭数を減らしたため、328トンと前年よりも9%ほど少なくなった。

育成受託牛は6頭、4月20日から10月20日まで180日間であった。

乳製品加工と乳肉製品の払下げ

本年の年間の生産量はほぼ前年並みであるが、瓶バターは前年在庫が持ち越しとなったため、生産を抑制した。チーズは本年も全日本ナチュラルチーズコンテストに出品し、優秀賞を受賞した。また、菓子原料としての需要が伸びており、ジャージー牛乳独特の風味と品質が菓子の舌触りや味に影響しているものと思われた。

こだわりの商品として通販サイトで牛肉販売を行った。評価はよかったが、やや期待外れに終わった。

情報発信と地域連携

牧場の活動を情報発信することは重要である。本年はテレビ放映1件、新聞3件、雑誌2件、書籍1件、その他、ミニコミ誌等の取材があった。

地域連携としてのイベントは今年も牧場主催の恒例の花祭り及びもみじ祭は中止、例年行われる地域の交流イベントもすべて中止となった。

体験等ふれあい及び研修と研究連携

酪農・畜産の理解醸成、自然理解の深める牧場主催の親子牧場体験は人数を制限し、回数を増やして行った。しかし、その他の幼稚園、小学校の体験学習や移動教室はほとんどが中止となった。

自然観察や体験の素材を得るため、麻布大学野生動物研究室と連携して大学院と学生の卒業研究を支援している。また、農研機構とはシカ個体数制御のために、定点観測として長期の調査を受け入れているが、出張規制などによって支障がでることとなった。

研修事業は寮の相部屋を避けるために人数を制限した結果、研修生は6名で、延べ105人日であった。

<公益事業 I：ジャージー種牛の放牧酪農経営における6次産業化モデルの構築に関わる調査・実証・研修事業>

1) ジャージー種牛の飼養

(1) 草地管理及び飼料生産

本年度も5月中旬から1番草の収穫を開始した。春先の降水量不足とシカの食害の影響で1番草がやや少なかったが、2番草、3番草は回復した。また、8月は雨天が続き、牧草の収穫作業が遅れた。9月以降は比較的順調な天候となった。このため、牧草生産は1番草が243個（前年度251個；以下（）内は前年度を示す）、2番草が280個（251個）、3番草は192個（127個）となった。合計で715個であった。前年の637個に比べると112%増であるが、平成27年から令和元年までの5年間の平均は815.6個であるから、多いわけではない。本年も峠3、峠4、は一番草のみ、切通、大畑、荻の平下、峠1は2番草までの収穫となり、後は放牧利用となった。2番草、3番草を収穫しなかったのは主としてシカによる食害である。シカの食害回避のため、環境省のシカ対策事業を牧場周

辺で行うことを要請し、群馬県により平成17年から令和2年の6年間に620頭のシカを捕獲した。粗飼料の不足分は稲ホークロップサイレージと輸入乾草で補っている。

（2）放牧飼養技術の確立及び乳牛改良・種畜供給

本年も4月15日から昼間放牧を開始し、5月11日から昼夜放牧となった。一方、秋期は11月8日より放牧地でのサイレージの給与を行いながら最終的には12月6日まで放牧を行った。峠地区への放牧は、雄の育成(肥育素牛)、桶萱地区は受託牛および育成牛群、本場地区は搾乳牛群であることは例年通りであった。

成牛は、年度始め69頭で始まり、初妊牛からの繰り上がりが12頭、事故・出荷等による淘汰が19頭で、年度末には62頭を次年度へ繰り越した。

育成雌牛の除却は21頭で、雄子牛の払下は34頭であった。分娩は雌37頭、雄30頭、死産1頭であった。合計68頭の出生であった。

年間総搾乳量は328トン（昨年359トン、1昨年353トン）で、前年より9%減となった。搾乳牛率は平均85.5%であったが、5～8月は目安の85%を下回った。乳量減少の原因は中期的な経産牛頭数の減少に加えて、乳房炎の発生が増加したことによる。乳質の推移は例年と特に変わりはない。

（3）放牧受託（公共育成牧場）

育成受託牛は4月20日から10月20日まで180日間、例年通り受け入れた。本年は東京都からのジャージー種3頭とホルスタイン種1頭、ブラウンスイス種2頭であった。ジャージー種以外は7月14日の途中入牧であった。併せて、牧場牛7頭も放牧を行った。退牧は10月19～21日となった。牧場牛のDGは0.53kg/日で、ほぼ昨年（0.56kg/日）と同様であった。人工授精は受託牛3頭と牧場牛3頭に行い、1頭の妊娠が確認できた。

2）畜産物の利用・加工技術の開発

（1）乳製品の生産利用・加工技術の開発

神津牧場の特徴は放牧とジャージー牛という高品質でアニマルウェルフェアに配慮した酪農とこれに基づく良質な乳製品の加工・販売までおこなうことにある。このことによって6次産業化による高付加価値を生み出している。

本年度もパック牛乳、ソフトクリーム、バター、チーズ、ヨーグルトなどで、それらの加工製造について、技術開発と製造を行っている。アイスクリームは牧場のレシピにより八ヶ岳中央農業実践大学校に委託している。需要は高いが、委託製造では生産量を増やせないという悩みがある。チーズはこれまで、いくつかのあたらしい製品開発を行い、その品質を世に問うてきた。本年度も中央酪農会議主催の第13回 ALL JAPAN ナチュラルチーズコンテスト（2021）に出品し、2点が優秀賞を受賞した。これまでの結果は下図にまとめたように高い評価を得てきた。

本年度の牛乳生産は93,375本（前年度82,146本）、バターは缶が5,063個（5,596個）、瓶が1,824個（5,877個）、ソフトミックスは44,250本（41,494本）、ヨーグルトは大瓶が10,377本（10,513本）、小瓶が69,172本（75,440本）であった。牛乳は飲用だけでなく、菓子原料としての需要が伸びている。ジャージー牛乳独特の風味と品質が菓子の舌触りや味に影響しているものと思われる。こうした独特な品質の価値を顕在化させるため、おみやげサイズの牛乳を使ったバームクーヘンの

委託製造を行ってきたが、消費動向を踏まえて、一人用のミニサイズのバームクーヘンを販売を行った。おみやげとしても一人用としても利用できるのも好ましいとの評価であった。

神津牧場のチーズコンテスト受賞歴				
製品名	大会名	部門	賞	主催者
神津牧場CHEDDARチーズ	第13回ALL JAPAN ナチュラルチーズコンテスト (2021)	ハード熟成6ヶ月以上	優秀賞	中央酪農会議
神津牧場サラミケーゼ	第13回ALL JAPAN ナチュラルチーズコンテスト (2021)	ハード熟成6ヶ月以上	優秀賞	中央酪農会議
神津トマト＆バジル	Japan cheese awards 2020	非加熱・加熱圧搾／バラエティ部門	No 1	チーズプロフェッショナル協会
神津ゴード	Japan cheese awards 2020		銅賞	チーズプロフェッショナル協会
神津トマト＆バジル	第12回all Japan ナチュラルチーズコンテスト (2019)		優秀賞	中央酪農会議
神津下仁田ねぎ	Japan cheese awards 2018	非加熱圧搾・アクティブ（風味付加）部門	部門賞	チーズプロフェッショナル協会
神津CHEDDAR	Japan cheese awards 2018	非加熱圧搾・熟成4ヶ月以上部門		チーズプロフェッショナル協会
神津ゴード	Japan cheese awards 2018	非加熱圧搾・熟成4ヶ月未満部門	銀賞	チーズプロフェッショナル協会
神津サラミケーゼ	Japan cheese awards 2014	非加熱圧搾・アディティブ部門	銀賞	チーズプロフェッショナル協会
神津モッツアレラ	Japan cheese awards 2014	パスタ・フィラータ部門		チーズプロフェッショナル協会

（２）乳製品の卸販売

生乳は、牛乳として販売する他、バター、ソフトミックス、チーズ、アイスクリーム、ヨーグルトに加工し、農産物直売所、スーパー、デパート等への卸販売、牧場のロッジとミルクバーにおける直接販売、カタログ等による通信販売で販売した。

払下形態別の販売額のシェアを見ると、卸が75.5%（78.9%）、ロッジが14.8%（15.5%）、通信販売が9.5%（5.6%）となっており、卸販売が中心となっている。

また、品目別のシェアをみると、ソフトクリームが約半分の35.9%（46.1%）を占め、ついで牛乳が31.7%（22.3%）、ヨーグルトの10.6%（13.5%）、バターの11.3%（10.0%）とつづき、アイスクリームとチーズは1.6%及び5.4%であった。ソフトクリームの減少傾向と牛乳の増加傾向が顕著であった。

前年度の比較では卸販売が前年比77%、ロッジが85%と減少し、通販が166%と増加した。品目別ではソフトクリームが前年比67%と減少している。ソフトクリームは乳製品販売額の44%を占めている重要品目であり、この回復が課題である。

（３）肉用肥育・加工

２年間粗飼料多給と放牧によって飼養し、その後４ヶ月の穀物肥育による２シーズン放牧肥育方式は土地利用型の赤身肉の牛肉生産として提案されている。しかし、肥育期間が長期にわたることからコストが増加するため、必ずしも普及するに至ってはいない。しかし、放牧によるメリットはカルニチンやカルノシンといった機能性成分が増加することにある。さらに、最近では穀物肥育とは異なり $\omega 3$ （オメガスリー）脂肪酸が増加し、 $\omega 6/\omega 3$ の比率が理想的な２に近づくことが明らかとなっている。神津牧場ではこうした特徴を前面に出して、直接消費者に訴求することで差別化し、高額販売につなげることにする。

去勢牛の放牧肥育は経済性を検討した結果、販売価格の大幅な値上げが必要となるため、生産を縮小し、鉄板焼コーナーでの提供とふるさと納税とこだわりの通販サイトでの食肉の直接販売を行った。鉄板焼コーナーでの販売は好評であるが、来客数の減少による影響は大きい。ふるさと納税での販売は品物の準備がやや遅れたこともあって、十分な宣伝ができなかった。通販サイトでは部位による影響が見られた。通販サイトは消費者の価格比較が強く表れた。一方、肉そのものの反応は良好であった。

また、従来のレトルト商品「神津牧場ジャービーフのカレー、ハヤシ、シチュー、煮込みのほか、加工品のドイツサラミ、ビーフジャーキー、パストラミ、ソーセージや食堂でのハンバーガーなどの販売はこれまで通りであった。

（４）放牧養豚

群馬県では令和３年度に、野生イノシシへの豚熱の感染例が１９件、農場での豚熱感染が４件報告されており、３６,６４０頭の察処分がなされており、発生が抑止されていない。このため、放牧養豚は前年に引き続き自粛した

３）実習生・研修生の受入れおよび外部研究機関との共同研究

本年も新型コロナの関係で、長期のものに限り受け入れ、一部断った。大学生２名、大学校１名、専門学校３名で、うち男性２名、女性４名　計６名であった。延べ１０５日間であった。

大学および研究機関との共同研究は麻布大学野生動物研究室とアナグマの生態やシカの行動調査などを連携し学生の卒業論文及び修士論文として公表している。こうした研究の成果は牧場での体験プログラムとして活用資することとしている。また、農研機構とはシカの定点観測として長期個体数調査を行っている。しかし、新型コロナ感染拡大の中で、研究職員の出張規制が行われるなど調査に支障がでた。

（１） 牧場体験及び緑資源の高度利用

牧場での体験を通して、酪農・畜産の理解醸成を図るべく、本年度も牧場主催での親子牧場体験を行った。密を避けるために人数を制限し、回数を増やして５回（参加者５９名（前年４５名））行った。参加者にはとても好評であった。人数を制限することで、より濃密な牧場体験となった。一方、県畜産協会主催の牧場体験や、幼稚園、小学校の体験学習はほとんどが、コロナの影響で残念なことに本年も中止となった。実施したのは幼稚園（１）、小学校（４）、大学校（２）及び群馬県食肉事業連合会（日帰り）（１０／２３）開催（３０名（うち子ども１２名））の８団体にとどまった。乳しぼり、ガイドツアー（牛追いツアー）を土、日に開催したが、バターづくりは室内のため中止とした。

現在、大学および研究期間との共同研究は麻布大学野生動物研究室とアナグマの生態や

シカの行動調査などを、農研センターとはシカの定点観測として長期個体数調査を行っているが、出張規制などによって支障がでた。

（２）家畜とのふれあい及び畜産理解醸成

本年もふれあい用として、山羊、うさぎ、ポニーの飼養、展示を行っている。屋外でも有り、密にならないように注意喚起をしながら、本年度も開放した。山羊のお散歩は子供達に人気があり、順番待ちもあることから時間制と少額の料金をとっている。この他、親水公園の隣接部分に設置したドッグラン（無料）は多くの愛犬家に利用されて、集客の一助となった。

（３）情報発信と地域連携

牧場の活動を情報発信することは重要である。本年はコロナの影響も有り、春夏は取材等も少なかったが、秋からは新聞、雑誌、書籍、ミニコミ誌等の取材が多数あった。以下に記す。

新聞 朝日ぐんま「百花繚乱」 4月16日

新聞 読売新聞(群馬版) 5月30日

放送 テレビ朝日「食彩の王国」の放送 8月21日

雑誌 宝島社 TJMOOK 「1日のはじまり、しあわせな朝のご飯」出版 10月13日

新聞 上毛新聞「チーズ全国大会優秀賞」受賞 2月8日

月刊誌 DAIRYMAN 2月号「山地酪農のジャージー乳から季節を感じるチーズ（公財 神津牧場）」

書籍 「ヨーグルトの本」向井智香著 MDNコーポレーション 3月29日発行

地域との連携では多くの行事が中止となった。

牧場主催の花祭りや紅葉祭りは本年も中止とした。

<収益事業>

公益事業を支援する収益事業の柱はロッジでの売店や食堂、宿泊等の提供と道の駅しもにたの「神津牧場ミルクバー」での販売である。本年もデルタ株やオミクロン株などの変異株の出現によって大きく影響を受けた。4月、5月は前年ほどではなかったが、減収となった。大きな影響を受けたのは8月で、気象の影響もあったが、お盆を中心とした人の動きがほぼ止まってしまった。対面販売では総じて、前年を上回るのはまれであった。年間を通してではミルクバーは前年比77%、ロッジの乳製品販売は89%、食堂等の販売は72%であった。本来、公益事業を支えるための収益事業であるが、本年のコロナ禍はこうした役割を果たせずに終わった。

1月に行われた百貨店「前橋スズラン 大群馬展」、「高崎高島屋 群馬展」も開催されたが、第6波と重なり、やや低調であった。